

無_ニ慈心_ニ而馬負_ニ重駄_ニ以現得_ニ惠報_ニ緣第廿一

昔河内國、有_ニ笊販之人、名曰_ニ石別_{一也}、過_ニ馬之力、而負_ニ重荷_{一也}、馬不_レ往時、瞋恚捶駆、負_レ荷勞之、兩目出_レ涙、壳_レ笊竟者、即殺_ニ其馬、如_レ是殺之、為_ニ多遍_ニ後、石別自纔臨_ニ涌釜_{一也}、兩目拔_ニ入於釜_ニ所_レ煮、現報甚近、応_レ信_ニ因果、雖_レ見_ニ畜生、而我過去父母、六道四生、我所_レ生家、故不_レ可_レ無_ニ慈悲_ニ也、

慈_ニぶる心無く馬に重き駄_ニを負して現に悪しき報を得
ることのもと
る縁 第二十一

昔河内國に笊販の人有り。名けて石別と曰ふ。馬の力を過ぎて重き荷を負し、馬往かぬ時には瞋恚_{一五}捶_{一六}驅_{一七}ふ。荷を負ひて勞れ、両の目に涙を出す。笊を売り竟ればすなはち其の馬を殺す。是くの如く殺すこと多遍して後に、石別自づから纔涌きたる釜を臨めば、両の目釜に抜入りて煮らる。現報はなはだ近し。
因果を信ふべし。畜生を見るとも、我が過去の父母なり。六道四生は、我が生るる家なり。故に慈悲無かるべからず。

第二十一縁 惠業についての現報説話。今昔物語集二十ノ二十九に書承。
三 木詳。本説話以外に所伝をみない。四 公私_ニの運米は五斗を一俵_ニとし、三俵を一駄_ニとした（延喜式・雜式）。五 底本訓釈（捶打也）。

六 底本訓釈（駄（於飛川加不））。七 涌いていれる釜をのぞきこむとすぐに、両目が抜けて釜に落ち入り、煮られた。「纔」は、「一する」と同時に、の意（原榮一。中村宗彥）。底本訓釈（纔比太_ニ）。八 烹炊_ニするための器。「釜」は足がない。涌き立つ釜の中に両眼が墮ち入るイメージは、眉間尺の説話の、煮えたぎる羹_{（いも）}の中に三人の首が墮ち入る説話（たとえは、搜神記、十一）を想起させる。九 梵網經・第二十輕戒に「若仏子、以_ニ慈心_ニ故、行_ニ放生業、一切男子は我父、一切女人是我母、我生生無_ニ不_ニ從_レ之受_ニ生、故六道衆生、皆是我父母」とみえる。類似の表現は肉食をいましめた文中にあることが多い。三 六道（地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人、天）と四生（胎生、卵生、湿生、化生）と衆生を分類したもの。

1 笹_一依

2 販_一敗

3 曰石_{（國）}—ナシ

4 往_{（國）}—得往

5 荷_{（國）}—重荷

6 笹_{（國）}—依

7 釜_{（國）}—金
8 抜入_{（國）}—ナシ